

0. 報告日：2012年 4月 25日（木）	
1. 訪韓期間と場所：2012年3月25日（日）～3月31日（日）、韓国：ソウル・江陵等	
資料 作 成 者	<p>（所属、学年） 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士後期課程 （氏名） 古後 信二</p> <p>2. 交流・調査の着眼点</p> <p>韓国の歴史的建築と風水思想の関係性。 韓国の現代建築が環境といかに呼応しうるか。 双方の対比することによって今後の研究の着眼点を見出す事。</p>
3. 調査記録（7.5 頁程度）	
<p>■2012/3/25 ソウル市 清溪川地区</p> <p>ソウル中心部に流れる川の再整備による親水空間の創出事例の視察からスタートしました。過去2度にわたり覆蓋工事によってふさがれていたのですが、ソウルを自然と人間中心の環境都市へと変貌させるために復元されたという事でした。これによって豊かな親水空間が都市中心に生まれ、多くの市民や観光客の憩いの場になっている事がみてとれました。</p>  <p>■2012/3/25 ソウル市 北村地区・三清洞地区</p> <p>伝統家屋群のある北村地区を散策した。坂の多い路地状の空間に、昔ながらの家屋が並び、独特な景観を形成していた。坂の頂上からソウル中心部と遠くの丘にそびえるソウルタワーが見える。ソウルを象徴する代表的なスポットとっていいだろう。歴史的保全区域として、近年から修復維持保存が行われてきたが、おもわくとは逆に投機的な動きが出始め、庶民が暮らす町であったものが、庶民が暮らしにくい町になりつつあるとの事でした。</p> <p>いずれにしても、細い路地と坂によって様々な見え方がする豊かな空間は、大変魅力あるものでした。</p>  <p>■2012/3/25 ソウル市 景福宮</p> <p>李氏朝鮮王朝を興した李成桂（太祖）が1394年に建てた王宮が景福宮。ソウルに数ある王宮の中では最初期のものになる。創建されてから豊臣秀吉による1592年の文禄の役（韓国では壬辰倭乱）で焼失するまで、約200年間正宮として使用された。</p>	

その後、1865年から復旧が始まるが、第二次世界大戦により朝鮮総督府庁舎が建つなど、受難の時代を経て、1997年に旧朝鮮総督府庁舎を撤去。復元工事が活性化していく。日本人と朝鮮人にとって複雑な感情がわきおこる空間でした。ソウル市中心部にこのような広大な歴史的な遺産が残っている事が、ソウルの都市景観に大きく影響を及ぼしている。宮内からみえる近代的な高層ビル群。その対比が非常に豊かな都市景観を創っている。



■2012/3/26 ソウル市 東大門デザインセンター

世界的建築家ザハ・ハディドによる意欲的なプロジェクト「東大門デザインセンター」を視察した。メイン施設はまだ工事中であったが、一部完成した公園部分をめぐった。

老朽化した野球場跡地の再開発であり、また、古くからの遺構があった場所。ここにデザインを軸にした公共施設と公共広場をつくるというものでした。

都市の記憶を残すという意味合いから、野球場の照明塔のいくつかが残されている。中心部の広場から、移籍と新しい建築と照明塔が見え、その向こうに近代的な街並みが広がっている。とても重層的な都市景観が形成されていた。



ザハ・ハディドの建築は3次元曲面がうねる独創的な空間であったが、遺構の一部の城壁の延長線上にもみえ、遠くに見える山並みを写し取ったかのようにも見えてくる。

ソウルの風水を読み取った高度な建築デザインが構築されているのではないかと感じた。

■2012/3/26 ソウル市 江南地区

江南地区は漢江の南側にあるエリアで、1970年代以降に急激に開発が進んだ所だ。

高層のオフィスビルが乱立し、整然と街路に並んでいる。その江南地区の都市空間を半日かけて徒歩によって視察した。ソウルは地震がない事と、開発区域が厳密に制限されているため、オフィスビルは自然と高層化の方向に向かうという。必然的に高層オフィスビルのデザイン競争のような状況となり、さまざまなデザインの高層オフィスビルが見られた。

世界的な建築家によるものもあり、大変刺激になったがこれだけの量を見るといくぶん食傷気味となった。



■2012/3/27 江陵市 江陵大学

江南大学において今回の視察ツアー最初の国際交流が行われた。大分大学学生の卒業研究プレゼンテーションが行われ、それに呼応するように江陵大学からは、卒業設計と卒業研究のプレゼンテーションが行われた。大分大学の学生は全員英語によるプレゼンテーションであり、江陵大学の学生の1人は完全な日本語で作成されたパワーポイント資料を用いてプレゼンしていた。双方の大学において国際的な視点をもった教育が施されている事に感銘を受けた。韓国の学生は兵役のため、日本の学生よりも2～3歳年上になるため、非常にしっかりした雰囲気があった。懇親会において、学生同士の親密な交流が行われた事は意義深いと思う。

■2012/3/27 江陵市 鏡浦台

1326年に創建され、1508年に現在地に移された亭建築の代表的なもの。5つの月で有名とされているらしく、夜空の月、湖に映った月、海に映った月、杯に映った月、瞳に映った月、の5つ。月を見て楽しむための名建築とっていい。極彩色の伝統建築であった。



■2012/3/27 江陵市 烏竹軒

烏竹軒は、朝鮮王朝時代の大儒学者であるイユルゴクとその生母で韓国における理想の母として頻繁に登場するシンサイムダンの生家である。イユルゴクは安東出身のイテゲとともに朝鮮儒学の二大巨頭とされ、5000ウォン札の肖像にもなっている。烏竹という名前は周囲が黒い竹に囲まれていることに由来する。約400年前の建物がきれいに残っていた。



朝鮮の木造建築のルーツとして、見ごたえがあったが、正直に言えば、ディテールを見る限り、日本の木造建築ほどの繊細さはないと思ってしまった。

■2012/3/27 江陵市 船橋荘

上流階級が暮らした伝統的大邸宅である「ソンギョジャン」。母屋の東別堂、居間の悦話堂、別堂にある庭内の池の中に建つ活来亭という東屋、祠堂といった建築群は両班屋敷の基本様式を守って建てられており、当時の両班の生活パターンがよくわかる。



幸いにも宿泊可能となっており、ここに宿泊できたことが最大の喜びであった。

風水の穴とされており、周囲は小高い岡でゆるやかに囲われている。昔ながらのオンドルの煙突がアクセントとなり、見事な建築の美しさであった。



■2012/3/28 安東市 太白(テベク)山

韓国において最も聖なる山として親しま

れている太白山へ登頂する。標高が1500m近辺であり、比較的登山しやすい山であるが、あいにくの降雪があり、アイゼン着用しないと登頂できない状況であった。風水思想にもとづくまちづくりが広がる朝鮮半島において、この聖なる山からエネルギーが流れ、分流し、各地に豊穡な環境を構築させてきた、いわば、その源流である。残念ながら、私自身は途中で断念してしまいましたが、大いなるなにかを感じ取ったことだろう。貴重な体験であった。

■2012/3/29 安東市 河回村

世界遺産にも選定されている韓国の伝統的な風水集落である「河回村」を視察した。韓国でも有数の両班である「柳」一族の村であり、代々の有数な人材を輩出してきたという。村の東方には太白山から連なる花山がそびえ、その裾野が丘を形成し村の西方まで続く。



現在も柳一族の末裔などがここで暮らし、観光によって入る収益により、この歴史的集落の保存と修復をまかなっているという。低い土塀に囲われた路地空間にいやされた。



■2012/3/29 安東市 屏山書院

美しい自然景観と抜きん出た建築美で有名なこの書院は洛東江が作り上げた岸壁の前に位置し屏山書院と呼ばれる。1572年に柳成龍がこの地に移し、186

3年には王より懸板を賜った。景観と融合する見事な建築美であり、さらに景観の美を増幅させるように配慮された建築であった。

■2012/3/29 安東市 俗離山法住寺

壮大な伽藍を誇る山寺で、創建は新羅時代にさかのぼるといふ。現在残る建物は朝鮮王朝時代のものだが、石塔や磨岩仏は新羅時代からのもの。境内には巨大な弥勒菩薩立像があるが、これは1989年に造られたもの。韓国唯一という木造五重塔、三大仏殿といわれる大雄宝殿などもある。



儒教におかれて、仏教寺院が山奥に追いつまれて、この地で栄えたという。見ごたえのある美しい木造の五重塔だった。

■2012/3/30 大田市 ハンバツ国立大学

ハンバツ国立大学との国際交流。大分大学学生の卒業研究のプレゼンテーションが3年生のクラスにおいて行われた。発表後、活発な質疑応答が行われ、有意義な国際交流が行われたとあっていい。来年はハンバツ大学の一団が大分を訪問する計画があるらしく、来年の再会を約束する場面も見られた。ハングル語、そして英語を用いて、カタコトながらも交流を深める学生達の姿を見、そして、私自信も英語でのコミュニケーションをはかる事ができた。大学院生の国際交流の重要性を感じたひと時でした。

■2012/3/31 釜山市 海雲台地区

海雲台市場から海水浴場から高層住宅群まで半日かけて徒歩により視察した。高層住宅のデザインは世界的建築家のダニエルリベスキンド。ヒュンダイグループのアイパークという高層住宅シリーズの一つのようである。カーテンウォールのオフィスビルのようにも見えるがレジデンスという事。すごい迫力だったが、足元の公共空間は強いビル風によって快適とはいえない空間となっていた。東北大震災後、日本人がこの高層レジデンスを購入するケースがふえたとか。釜山は福岡からも近い。



■2012/3/31 釜山市 釜山シネマセンター

コープヒンメルブラウ設計による複合文化施設である釜山シネマセンターを視察する。

世界最大といわれる片持ちの大屋根に覆われた大空間を持つシネマコンプレックス。野外劇場まである。歴史的な建築をたくさんみてきた中では、今回のツアーではもっとも現代的な建築物の視察という事になった。ヒューマンスケールの環境と一体となった建築とは違い、都市空間に暴力的に威容を表現する建築物を理解するには少々時間がかかった。

我々は旅行者の視点からつい旅情的な気持ちで見えてしまうが、釜山の現代の若者にとって、このような現代的な建築がもとめられている事は事実であろう。この建築に釜山らしさがあるかといわれればないという事になるが、世界的な建築家による建築作品を釜山の人達は欲しているわけだし、釜山国際映画祭の舞台にもなるこの空間は世界に誇れるものでありたいと思う気持ちも理解できる。今回のツアーの流れからすると、異質な建築のように感じるが、韓国の現代建築ツアーという視点にたてば必須の視察ポイントではある。



#### 4. 全体の感想と今後の抱負（半頁程度）

6泊7日という行程のなかで、ソウルから釜山まで、南下しながら、2つの大学においての国際交流を軸に、各地の建築や環境、そして文化を視察した。修士1年生を対象にしたものであったが、社会人ドクターとして特別に参加させていただいた。その総括を行いたい。そして、約20年前に私が書いた修士論文「風水思想をふまえた景観解析」をベースに、現在も風水研究は佐藤ゼミにおいて継続され、韓国のとある集落を対象に調査・解析がおこなわれているわけで、風水思想が色濃く残る韓国の風水スポットにおいてその空間を実体験する、という事が大きな意味をもつ。そして、これからの学位論文への手がかりをつかむ事にあっただろうと、帰国後によりやく腑に落ちた。風水思想を完全に取込んだ集落として、世界遺産にも選定された河回村（ハフェマウル）。この集落での空間体験はわたしのこれまでの経験のなかでも類を見ないものであった。対比するように見た建築はソウル市の東大門デザインセンター。設計は世界的に名を馳せるザハ・ハディド。当初はいくぶんミーハーな気持ちで見に行こうとおもっていた部分が大きかった。ザハ・ハディドは、香港のザ・ピークのコンペで磯崎新に見出されて世に出た建築家。このときのコンペも龍脈から流れる気の流れを表現したものであったと記憶している。環境と呼応するための古来から伝わる風水理論は、河回村で究極の姿を見せ、ソウル東大門において最先端の建築空間を生み出しているという、大きな発見ができたのが今回の視察ツアーだった。